

東京経済大学報

2016年度 第49巻 第2号



TKU 120

CHALLENGE 2020
SINCE 1900

あと3年で、創立120周年です。

2017年の新春を迎えて

謹んで新春のお慶びを申し上げます。皆様には平素から本学へのご協力・ご支援をいただき、感謝申し上げます。

本学は2020年に向けて、堺学長のもとで教学改革が進められておりますが、同年は1900年に本学の前身である大倉商業学校が大倉喜八郎翁によって創立されて120年を迎えます。昨年から周年記念事業について、学内で創立120周年記念事業実施委員会、国分寺キャンパス第2期整備構想委員会、創立120周年記念事業募金委員会規程及び募金委員会等を設置し、それぞれ検討がされ、その骨子がまとまってきました。

記念事業は大きく3つの事業からなります。

(1)国分寺キャンパス第2期整備事業

建物の耐用年数から、葵陵会館、第一研究センター、4号館等の大改修、建替えや環境整備等の事業

(2)120年史編纂及びスポーツ、学術等の学生支援事業

(3)募金事業

前回の100周年記念事業は、総額60億円を投じて中心となる100周年記念館、国際交流会館、学生厚生会館、第3研究センター、2号館の建設とキャンパス基盤整備を行うための募金事業を行い、多額のご寄付をいただきました。今回は教育施設等の充実だけでなく、120年史編纂や学生支援の事業も考えており、ハードとソフトの両面からの記念事業を計画しております。

新春を期して、それぞれ具体的な実施案の策定をし、行動していきたいと考えております。2020年までの長い道のりとなりますが、周年事業の成果は少子化が進むなか、本学の将来を左右することとなります。

皆様の絶大なるご協力・ご支援を期待しております。

学校法人 東京経済大学 理事長 岩本 繁



新春を迎えて——「私の転機」

皆様、あけましておめでとうございます。

年が変わると、自分自身にもなにか変化がほしいとよく思うのですが、お正月にそうした変化が生じたことはほとんどなかったと言えるかもしれません。

しかし、私にも「自分なりの大きな転機」があったことは事実です。それは40歳前後の数年間に起こっています。その変化とは、人間のさまざまな行為を非常に尊いものとして思えるようになったことです。そして、遺伝子・身体・脳によって創りだされる人間の能力は、何万年何億年という長い年月をかけて作り出された「進化と歴史の産物」にはほかならないと考えるようになったことです。人間って、生物って、スゴイということを発見したのです。

発端は、「自分がなぜ生まれてきたのか、そしてどうして死んでいくのか」という極めて根本的な問いかけに対して、自分なりに対峙してみようと思ったことです。それを知るために、ずいぶんたくさんの本を読み漁りました。その結果は、かなり後になりましたが、『あなたが歴史と出会うとき [新版]』(2009年)にまとめることができました。あくまでも「自分なりの」ものでしかありませんが、私の人間観に一つの軸ができたように考えています。

迷いと戸惑いの毎日ですが、学長に就任してから3回目の新春を迎えるにあたって、今一度「私の転機」を再確認したうえで、日々精進していきたいと思っています。

大学をめぐる環境は、今後ますます厳しくなっていきますが、私なりにベストを尽くしていきます。本年も、皆様方のご理解とご協力を、よろしくお願い申し上げます。

東京経済大学 学長 堺 憲一



理事長・学長

新年のあいさつ

教学ビジョン 「東経大チャレンジ2020」 の策定

東京経済大学 学長
堺 憲一

はじめに

2014年4月に学長に就任して以来、大きな目標のひとつとして、東京経済大学が進むべき方向性を明確にするために「教学ビジョン」の策定を掲げてきた。それに向けての進捗状況については、その都度教職員や理事会の皆さんに示してきた。そうしたプロセスを経て、2016年秋にまとめることができた教学ビジョン「東経大チャレンジ2020」は、5頁に示されたものである。まずは、そのビジョンがめざす点について説明したい。

1 「東経大チャレンジ2020」がめざすもの

教学ビジョン「東経大チャレンジ2020」のめざすところは、二つである。

一つ目は、「エデュケーション」「キャリア」「サポート」「キャンパス」という4つのクオリティの向上を通じて「チャレンジする大学」をつくりあげていくこと。二つ目は、4つのクオリティの向上

を通して「チャレンジする学生」を育成していくことである。

一口でいえば、「チャレンジする大学と学生」「はじめて物語」の創造をめざすという点に集約される。なぜ「チャレンジ」なのか。それは、建学の精神である「進一層」に由来している。と同時に、大倉喜八郎がさまざまな分野で「チャレンジ精神の旺盛なバイオニア」として、「日本初」を創造してきたことや、大学のみならず卒業生、教職員、学生たちもまた、多くの「日本初」もしくは先駆的なトライアルという意味でいわば「はじめて物語」を演出してきたという「歴史と伝統」を有していることが背景にあるからである。

では、学生のチャレンジとはいかなるものなのか。学生のなかにも、「日本初」という文字通りバイオニア精神を発揮した者がいることはいうまでもない。ただ、ここで想定していることは、本学に入学した学生たちが、学びや課外活動を通じてさまざまな「はじめて」を経験し、「入学前（ビフォー）」から「卒業後（アフター）」へと大きく成長していく姿である。ビジョンのなかで挙げられていることの大半は、すでに社会で活躍している人にとっては、ごく当たり前の行為に過ぎないものかもしれない。ところが、大学に入学したばかりで、初めてそれに取り組

む学生たちにとっては、それらの多くは「未知の世界」にほかならない。

学生たちの心のなかは、大海に漕ぎ出す船乗りの持っている希望と不安が入り混じった状態になっているのではなからうか。「学生たちの『はじめて物語』」には、そうした等身大の学生たちの成長を支えていくという本学の心意気・基本姿勢が投影されている。

そうした考え方を軸にして、今後も、教学上の改革を行っていきたいと考えている。

2 「東経大チャレンジ2020」の内容

「東経大チャレンジ2020」は現在の大学の特徴をまとめた「4つのクオリティ」、前項で述べた学生たちの「はじめて物語」、大学改革のための「7つの重点項目」からなっている。

4つのクオリティでは「エデュケーション・クオリティ 自ら学ぶ、ゼミする東経大」、「キャリア・クオリティ 安心の、就職力」、「サポート・クオリティ 自立を促す、多様な支援」、「キャンパス・クオリティ 環境との共生、地域社会と

の連携」の4つを取り上げ、それぞれについて7つのチャレンジ項目をあげた。

例えば、「エデュケーション・クオリティ」では「初年次教育」「教養教育」「専門教育」「ゼミナール」「資格取得」「ベーシックプログラム」「アドバンストプログラム」の7項目である。これらについて現状を客観的に分析し、課題を洗い出し、改革を実行していく。「4つのクオリティ」は現在においても本学の誇るべき特質であるが、これをさらに魅力的なものとしていくことは、本学の更なる発展に欠かすことのないものである。

「7つの重点項目」は大学が直面するさまざまな課題に、大学全体で取り組んでいくための大目標である。

「7つの重点項目」に関するこれまでの成果の一端について簡単に紹介すると、「教育改革」では学長就任と同時に立ち上げた「教学改革推進会議」での精力的な検討をベースに、2017年4月の「キャリアデザインプログラム」誕生などを指摘することができる。「学生支援」では「教職ラウンジ」を新設し、「学生相談室」を充実させた。「キャリア力」では社会人基礎力と持続的就業力を身に付ける「進一層科目群」を2017年4月にスタートさせる。「国際化」では「国際化推進戦略会議」を設ける一方、「グローバルラウンジ」を開設した。「社会

連携」では地域連携センターを開設し、シンポジウムや共同研究など産学連携の試みを進めている。「大学院」では中国の有力大学との協定を進め、優秀な留学生の受け入れに注力している。「内部質保証」では大学の活動を点検改善するPDCAサイクルを働かせていくことで大学の質的充実に取り組んでいる。

今後はすでに実施していることをさらに充実させていきたいと考えている。

3 教学ビジョンの公表に向けて

今回作成した左記の「教学ビジョン」は対外的に公表するバージョンでない。教学ビジョンをよりわかりやすく、ビジュアル化した公表用のバージョンを策定することを考えている。

その公表は2016年度末を予定している。公表時には、2020年に迎える創立120周年に向けて、何をどのようなかについて明示した「ロードマップ」もあわせてご覧いただくよう思っている。

東経大チャレンジ 2020

エデュケーション・クオリティ 自ら学ぶ、ゼミする東経大

- Challenge 1. 生徒から学生へ！ 基礎力育成の初年次教育
- Challenge 2. 視野を広げる！ 全学共通の多様な教養教育
- Challenge 3. 4つの学部で！ 社会科学系の充実した専門教育
- Challenge 4. アウトプットを生み出す！ セミナールとワークショップ
- Challenge 5. 学内でWスクール！ 正課授業と資格取得講座
- Challenge 6. 基礎力をつける！ ベーシックプログラム
- Challenge 7. プロフェッショナルを目指す！ アドバンスプログラム

キャリア・クオリティ 安心の、就職力。

- Challenge 1. キャリア意識を高める！ 特色あるキャリア形成科目
- Challenge 2. 社会人基礎力と持続的就業力を！ 進一層科目群
- Challenge 3. 2年次から学部選択！ キャリアデザインプログラム
- Challenge 4. 就業体験！ 学部授業・地域連携などでのインターンシップ
- Challenge 5. 海外で学ぶ！ 海外ゼミ研修、短期語学研修、長期留学
- Challenge 6. 資格取得！ 専門学校と提携したキャリア・サポートコース
- Challenge 7. 1年生から始まる就職行事！ 年間800回の多彩な行事

チャレンジする大学 「はじめて物語」の創造

サポート・クオリティ 自立を促す、多様な支援

- Challenge 1. 経済支援！ 充実した奨学金・授業料減免
- Challenge 2. 修学支援！ 学習センターの相談員による個別相談
- Challenge 3. 生活支援！ 学生相談室の専門家など充実した相談体制
- Challenge 4. 就職支援！ キャリアセンターの学生全局面談
- Challenge 5. 目的に応じた支援！ グローバルラウンジ、教職ラウンジ
- Challenge 6. 父母の会による支援！ 奨学金・助成金・表彰制度
- Challenge 7. 卒業生による支援！ 業界別・地域別就職支援、奨学金

キャンパス・クオリティ 環境との共生、地域社会との連携

- Challenge 1. 環境意識を育む！ エコキャンパス宣言
- Challenge 2. 自然を保護する！ 国分寺キャンパス
- Challenge 3. 充実した運動施設！ 武蔵村山キャンパス
- Challenge 4. 最新の学習設備！ アクティブラーニング対応の図書館
- Challenge 5. 多目的ホール、大学史料展示！ 大倉喜八郎 進一層館
- Challenge 6. 地域社会との連携！ 地域連携センター
- Challenge 7. 都心のキャンパス！ 大手町サテライトの利用

チャレンジする学生

学生たちの「はじめて物語」—東経大エクスペリエンスの実践—

- Challenge 1. 学問を修める！ 授業で学ぶ、社会・自然・人間を知る
- Challenge 2. 得意分野をつくる！ 知識を深める、スポーツや文化活動を究める
- Challenge 3. 好奇心を広げる！ 見聞を広める、イベントに参加する、友人関係を広げる
- Challenge 4. 成果をまとめる！ レポートをまとめる、プレゼンを行う、卒業論文・卒業制作に挑む
- Challenge 5. 外国を経験する！ グローバルラウンジを利用する、海外ゼミ研修に参加する、短期留学・長期留学に挑む
- Challenge 6. ボランティアに挑む！ ボランティアに参加する、地域で活動する、まちおこしに挑む
- Challenge 7. 資格をめざす！ キャリア・サポートコースを受講する、アドバンスプログラムに挑む

7つの重点項目

教育改革

学生支援

キャリア力

国際化

社会連携

大学院

内部質保証

創立120周年記念事業

事業計画・事業報告

建学の精神 — 「進一層」「責任と信用」 —

と寄付金募集について

ご挨拶

2017年1月

学校法人 東京経済大学 理事長

岩本 繁

東京経済大学 学長 堺 憲一

東京経済大学は、2020年に前身の大倉商業学校創立から120周年を迎えます。本学はこの120周年を節目に、教育・研究の一層の充実と、そのために必要となる施設の整備を計画し、本学のさらなる発展の基礎を築きたいと考えています。

東京経済大学は、「進一層」および「責任と信用」という「建学の精神」を大切に、「チャレンジ精神」を有し、「責任と信用」のある人材の育成に努めるとともに、ユニークな教育制度を導入してきました。

2007年度には「TKUチャレンジシステム」をスタートさせました。社会人として必要となる基礎力を養う「ベーシックプログラム」、充実した専門科目で知識を得る「学部・学科教育」、公認会計士や税理士等の高度な資格や国際社会に通用する語学力を習得する「アドバンスプログラム」の三層構造からなる教育システムをつくりあげたのです。そして、今春2017年4月には、本学の教育とキャリア支援の集大成ともいえる「キャリアデザインプログラ

ム」をスタートさせることになっております。東京経済大学への関心は、益々高まるのではないかと考えます。

設備面では、自然との共生をテーマに環境に配慮した新5号館が2012年4月に建ち上がり、2014年4月には5号館に沿うように新図書館が建設され、学生たちの学びの空間がより充実したものとなりました。この二つの建物は、植物との共生を図った特徴的な外観と、光溢れる室内空間が良質な学校施設として高い評価を受け、「グッドデザイン賞」を受賞しました。

以上のように、本学は「チャレンジする大学」「面倒見の良い大学」「就職に強い大学」として独自の地位を築いてまいりましたが、創立120周年を機に、教育・研究面、設備面においてさらなる強化を図り、本学の一層の発展のための基礎を作りたいと決意しています。

このため本学は、2017年2月から2021年3月にわたり、「チャレンジする

大学」という考え方を前面に押し出すことを通して、総事業費90億円の120周年記念事業と、そのための総額20億円の寄付金募集を行うことを決定しました。記念事業としては、教学ビジョン「東経大チャレンジ2020」に基づき教育研究の充実を図っていきます。施設面においては、国分寺キャンパス第2期整備事業として、「新薬陵会館（仮称）」「新教育研究棟（仮称）」「新研究棟（仮称）」などの建設と、新次郎池周辺整備などを計画しています。このほかにも、120年史の編纂や各種記念行事を実施していきます。

このたび、卒業生・教職員各位及びその他本学関係者各位に對しまして、この記念事業の趣意書と寄付金募集要項をお届けしてお願ひさせていただくことになりました。なにとぞよろしくご理解・ご協力くださいますよう、略儀ながらお願ひ申し上げます。

敬白

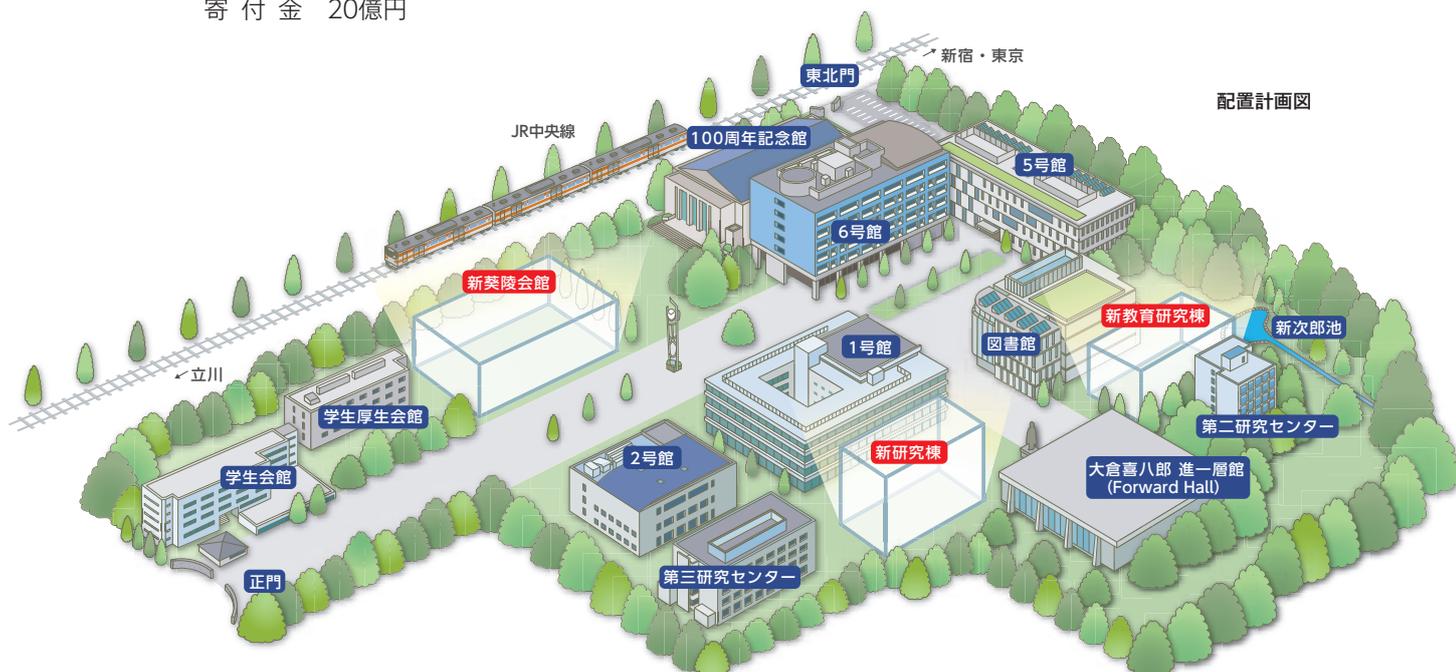
創立120周年記念事業

創立120周年記念事業計画の概要

- ① **教育研究の充実**
 - ・ 教学ビジョン「東経大チャレンジ2020」に基づく改革
- ② **施設・設備の整備**
 - ・ 国分寺キャンパス第2期整備事業
 - (a) 「新葵陵会館（仮称）」「新教育研究棟（仮称）」「新研究棟（仮称）」の建設
 - (b) 新次郎池周辺整備
 - (c) 防災井戸の掘削
- ③ **記念出版**
 - ・ 『東京経済大学120周年史』の編纂（通史編、資料編、普及版の発刊）
- ④ **記念事業・行事**
 - (a) 駅伝大会での活躍を支援
 - (b) 学部主催記念事業・行事（現代法学部開設20周年記念行事を含む）
 - (c) 『学生たちのはじめて物語』（2017年度入学生の成長の記録を映像化）
 - (d) 『はじめて物語』
（大倉喜八郎、東京経済大学、教職員、卒業生、在学生の『はじめて物語』を書籍化）
 - (e) 「国際学生セミナー・国際ワークショップ」の開催
 - (f) 「地域と環境の再生と発展——多摩・東京・世界——」、特別授業、シンポジウム、記念出版
- ⑤ **記念式典**
 - ・ ホテルオークラ東京で開催（2020年10月予定）

資金計画の概要

総事業費 90億円
寄 付 金 20億円



国分寺キャンパス第2期整備構想委員会の構想による「配置計画図」。今後、詳細な設計を行い、実施プランを作成していきます。検討によっては「配置計画図」が変更する場合があります。なお、学生会館、第二研究センターについては、新施設完成後、取り壊しも含めて検討しています。

国際シンポジウム 「自治しうる 〈主体〉と〈場〉を 問いなおす」 を開催して

国際シンポジウム
実行委員会委員長

羽貝正美

現代法学部 教授



1 成功裏に終わった 国際シンポジウム

昨年11月5日(土)、6日(日)、二日間にわたり、本学・大倉喜八郎進一層館(フオワードホール)において、東京経済大学学術研究センター主催の「基礎自治体のサステイナビリティとローカル・ガバナンスに関する国際シンポジウム」が開催され、成功裏に終えることができた。シンポジウムの名称について補足すれば、その趣旨と問題意識をクリアに打ち出すために、フライヤー、ポスター等の広報ならびに当日の資料プログラム等では、「自治しうる〈主体〉

と〈場〉を問いなおす」という表現を同時に用いている。

本シンポジウムの名称にいくぶん硬い印象をもった方もおられたかもしれない。「研究者や専門家だけのシンポジウムではないか」と。しかし、意図したことも、実際の内容もけっしてそうではない。ご報告いただいたフランス(リヨンス・ラ・フォレ)、ドイツ(コルンラード)、日本(木曾町開田高原、南木曾町妻籠)の4つの自治体・地域はいずれも決して恵まれた条件にあつたわけではない(今も)。むしろ、交通、産業等、不利な環境にあつたといつてよい。それをどうプラスに転じてようとしてきたか。

2 国際シンポジウムを支援 くださった方々と後援団体

大きな社会経済環境の変化を受けとめつつ、住民の暮らしをどう維持してきたか。また地域をいかに守り、未来につながるようなまちをつくっていくか。こうした課題に精魂傾けてきたフランス、ドイツの小規模自治体(どちらも人口約800人)の長と日本の地域リーダー。報告内容と討論は、これまでのまちづくりの歩みを振り返り、かつ、今、現実に私たちが直面している諸課題をめぐって展開した。両日とも午前9時半から午後5時までの長時間。しかし途中で帰る方々はおられなかった。内容については後半で改めて紹介したい。

本シンポジウムは、学術研究センターによる研究助成を得て実現したもので、実施にあつて、多数の本学職員の方々のご理解とご協力、支えがなければ実現しえない企画だった。この場をお借りして、改めて心からお礼を申し上げます。

またこのシンポジウムの企画に官民14団体から後援をいただいたことも、企画した主体としては非常に有難く、設定したテーマに共感していただき、側面からの励ましを得たことは率直に嬉しいことだった。一例をご紹介します。ば、総務省をはじめ、在日フランス大

使館/アンステイテュ・フランセ、ドイツ連邦共和国大使館といった国レベルの公的機関、日本自治学会、コミュニティ政策学会、土木学会、建築学会、都市計画学会など文系・理系の学会、日本都市センターやトヨタ財団、鹿島学術振興財団、そしてNPO法人「日本で最も美しい村」連合。多数の後援団体の存在はそれだけシンポジウムのテーマが様々な分野に関わっていることを物語っている。

4人の通訳の皆さんの大活躍も忘れられない。「同時通訳とはこういうものか」と感じながら、プロの仕事ぶりや驚異的な集中力、真剣勝負の姿勢を目の当たりにすることとなった(のちに、「同時通訳は格闘技と同じ」という表現に接した)。全員が通訳を職業とする方々ということではないが、それぞれに、長期にわたる滞仏・滞独生活の経験を活かしながら、仏、独のゲストとのコミュニケーションはもちろん、その内容を正確でわかりやすい日本語をとおして会場に伝え、参加者とゲストをとつないでくださった。

最後に、筆者のゼミに所属する学生9名(内女子学生1名)には事前の広報関連の仕事や直前の会場セッティングの準備、さらに当日の受付・応接・進行などにおいて、また他大学の理系分野(建築、都市計画など)の学生・大学院生7

名にはパネルの製作とホールでの展示において、それぞれもてる力を存分に発揮してもらった。記して感謝の気持ちを伝えたい。若い学生たちが、シンポジウムの趣旨に共感しつつ主体的に動いてくれたことは、新鮮な発見であり、何よりも大きな喜びであった。会場にお越しになった方々からもその仕事を評価していただいた。

3 国際シンポジウムの 原点と特徴

この機会にシンポジウムの企画に至る経緯を簡潔に紹介したい。このシンポジウムのいわば原点は、現長野県木曾町開田高原（旧開田村）のバイオエナジックな景観政策に注目した、公共経営と景観工学を専門とする二人の研究者による調査・研究にある。そこから10年近く、本格的な共同研究のかたちが整った後に限定してもすでに6年ほどの時間が経過している。途中で、自治体行政・自治体政策分野の筆者が参加して3名となり、さらに社会哲学、建築学の専門家がメンバーに加わって、文字どおり「文理融合」学際的な「風景―主体研究会」が結成された。現在、



チームは6人からなるが、東工大名誉教授（風景論）の中村良夫先生がアドバイザー的なかたちで研究を支えてくださっている。

定期的に積み上げてきた研究会の開催は、シンポジウム直前、10月末の研究会を含めてすでに35回、この間、

2013年春にはバリエーションが豊富で開催された国際シンポジウム（共通テーマは「ランドスケープ（風景・景観）と想像力」）で報告し、同年秋季には早稲田大学公共政策研究所の協力を得て、同大学でシンポジウムを開催した。その折のテーマは「風景とローカル・ガバナンスを問う」。翌年、その成果を『風景とローカル・ガバナンス―春の小川はなぜ失われたのか―』というタイトルで一書にまとめ、早稲田大学出版部から上梓した。

この共同研究の最大の特徴は、極めて具体的なかたちで私たちの目に映る物理的な空間のありよう、その実態を手がかりにしつつ、一貫して「自治」や「ローカル・ガバナンス」とはいかなるものかについて、また空間と社会（住民、地域、行政、議会）はどう関連しているのかについて、さらに現実の問題

（二例を挙げれば、そこに人の関わりが感じられないような、ばらばらになったコミュニティを象徴するような風景の劣化）をどのように克服していくかについて、常に基礎的・原理的研究を追求してきた点にある。メンバーの一人の言葉を借りれば、「根っこから考える」ことを追求してきた。本国際シンポジウムはこうした助走的調査・研究の延長線上に、これまでの成果を基礎として企画された。

4 主体と場：国際シンポジウム における問題提起と成果

以上のような経緯で企画された本シンポジウムには、大別して二つの焦点がある。

第一の焦点は、存続の危機にささげられている「自治の器」・市町村の自治の担い手（具体的には住民、地域、行政、議会）とその主体性を改めて問うてみたという点にあった。初日の冒頭、筆者はいったん「地方自治」から「地方」という表現をとって、そもそも「自治」とは何かについて考えてみたいと問題意識を伝え、「自治なき地方自治に意味があるか」という問題提起をした。第二の焦点は、自治の主体はどのようなに育まれるのかという視点から、個人や地域を共同体（市町村）に結びうる場として風景や景観、身近な環境を想定し、そうしたいわば「人間ならざるも

の」の人間の意味と社会的機能を具体的に考えてみようという点にあった。

シンポジウムの報告とパネルディスカッションは、いずれも基本的にこれら二つの焦点を軸に展開した。アソシエーションやフェラインといった住民発意の主体的な活動、そこから議員候補者が生まれてくる事実、住民と行政・議会との距離の近さ、市町村合併後の地域づくりと住民参加など、いずれも、これからの日本の自治と地方自治、そして地域づくりのあり方を考えようとするとき、避けて通ることができない検討課題であり、示唆に富む手がかりであった。

とくに日本の事例を含めて、一見、特別な自治体・地域の事例のように見えて、実はその具体的取り組みのプロセスの中に普遍的なものがあることを、改めて自覚的に捉えることができたことは大きな収穫だった。こうした思いは、おそらく多くの参加者に共通するものではないだろうか。ひとつのテーマを軸に、様々な文化や立場の人間が集い、出会い、互いに意見をかわし、共感しえたとすれば、そのことだけでもこのシンポジウムの開催に十分意味があったといつてよいであろう。しかし、この共同研究はまだスタート地点にすぎない。この思いをもつて、さらに考察を深めていきたい。

『戦争終結前後の大倉経専』

木村靖 著 (昭和二十三年卒) の紹介

東京経済大学 史料室
永山和彦

はじめに

この記事では、体験記『戦争終結前後の大倉経専』(世間では大倉高商と言われていた)を紹介し、

著者の木村靖氏は、戦時下の一九四五(昭和二〇)年に大倉経済専門学校(以下、大倉経専と略)に入学し、戦後の一九四八(昭和二三)年に同校を卒業された方です。大倉経専は翌年一九四九(昭和二四)年、新制大学・東京経済大学に昇格しました。戦前の学校制度は現在とは違います。又、戦時中には幾つもの臨時措置、制度運用が行なわれます。現代の学生の皆さんには理解しにくいことでしょう。簡単に説明しながら当冊子を紹介し、

1 体験記紹介の経緯

同書が木村氏より本学に寄贈された経緯を簡単に紹介します。本学は沿革史に関する様々な資料を収集・整理・保管してきました。その中には、卒業生から寄贈された在学時代の様々な資料も含まれます。そうした資料は、二〇〇五年刊行『東京経済大学の二〇〇年』、二〇一四年開設「大倉

喜八郎 進二層館」内の「沿革史展示スペース」設置にも活用されました。このスペースに展示された大倉経専時代の学生服の寄贈者・天野賢二氏から同期の木村氏の体験記のことが紹介され、当冊子の寄贈にいたりしました。当冊子は史料委員会です題となり、大学報等で紹介してはという意見が出され、当記事となりました。

2 当冊子には何が書かれているか

当冊子はA5判、三八頁の体験記です。一九四五(昭和二〇)年三月の入学試験受験前後から、勤労働員中の様々な経歴、同年八月二五日の敗戦を経て愛知県岡崎市へ一時的に帰るまでが体験記の柱です。三月下旬、入学試験のため上京した際に目撃した三月一〇日の東京大空襲による浅草一帯の惨状、名古屋での空襲の夜に受け取った合格電報、立川での住み込みの勤労働員、度重なる空襲、農家の消火作業、終戦、混乱の中での帰郷など様々な出来事が、級友達の動静を織り混ぜて詳細に描かれています。内容は重たく、読む者にずしりと伝わり、

3 戦争末期の年に大倉経専に合格

旧制中学校四年生で半年後に卒業を迎える木村氏は進学について、知人の早大卒業生で三井物産の商社マンから助言を受けました。「来春は中学四年生、五年生が同時に卒業し、まともなぶつかっていったら、五年生の方が有利」で「兵役回避のため皆が理系を狙う」ので「文系を狙うべきだ」との助言です。「そこで勧められたのが東京の大倉経専」であり、翌昭和二〇年三月二四日に受験、三〇日に合格電報を名古屋の実家で受け取ります。名古屋の夜空での巨大爆撃機B29来襲の様子を自宅から眺めていると、合格電報が届きます。「突然、「電報」という声。この敵機が頭上を飛び回っている最中に、とても考えられないことだったので、我が耳を疑った。また「電報」という声に急いで門に出ると、そこには、てつぱん鉄兜を被った郵便局員が立っていた」。

4 旧制中等学校修業年限五年の四年への短縮

さて、一九四五(昭和二〇)年三月、旧制

中学校の四年生と五年生がなぜ同時に卒業したのでしょうか。

旧制中学校は本来修業年限五年を基本とし、卒業後、旧制の高等学校、旧制専門学校、旧制大学予科等の上級学校へ進学する人々もいました。飛び級により旧制中学校四年修了後に、上級学校へ進学する人もいましたが、戦局が悪化する一九四三(昭和二八)年の中等学校令の改正により、修業年限が同年入学生から四年に短縮されます。更に翌一九四四(昭和一九)年の閣議決定「決戦非常措置要綱」により、在校生にも修業年限短縮が拡大したため木村氏達四年生は五年生と一緒に卒業することになったのです。

5 大倉経済専門学校、国家は「商」をさけた

次に、大倉経済専門学校の校名についてです。なぜ大倉高等商業学校ではないのか。一九四三(昭和一九)年の専門学校令の改正、実業専門学校令の廃止により、高等商業学校や専門学校が一つの制度のもとに一本化され、同時に理系重視の国策によって校種転換が進みます。商業系に留



まる学校は入学定員を半減され、更に「商」の文字の無い校名への変更を一九四四（昭和一九）年に行います。大倉高等商業学校も大倉経済専門学校へと名称変更を余儀無くされます。「商業」という名称さえ忌避した当時の状況を反映した措置「文部省『学制百年史』」でした。旧制大学でも東京商科大学（現一橋大学）は東京産業大学、神戸商業大学（現神戸大学）は神戸経済大学と校名を変更します。

6 学徒勤労動員

大倉経専に合格した木村氏ですが、4月から大倉で学ぶようにはなりません。大倉経専からの呼出し状が来ない状況下で、卒業した旧制中学校のもとでの学徒勤労動員に従います。

学徒勤労動員とは、根こそぎ動員によって生じた深刻な労働力不足を打開するため、旧制中等学校以上の生徒及び学生が軍需工場や食料生産へ動員されたことをいいます。一九四三（昭和一八）年の閣議決定「学徒戦時動員体制確立要綱」以降、戦局悪化に伴い動員施策が次々と出ます。一九四五（昭和二〇）年三月の「決戦教育措置要綱」による一年間授業を停止する措置によって通年動員体制となり、学校教育は事実上崩壊します。

7 地獄で仏、教授に感動

木村氏に大倉経専からようやく「七月

二五日に立川へ出頭せよ」と呼出し状が届きます。木村氏は疎開のためこれを二六日に受けとっており、二八日に大倉経専学生の動員先・日立航空機立川工場に到着します。職員室で、木村氏は陸軍中佐の丁寧な返事に驚き、教授と先輩学生に感動します。

『教授から「貴方は今日から大倉経専の生徒です。貴方は今日から社会人です。これから社会人としての自覚を持って行動してください」と言われた。殺伐とした中学校時代の延長かと思っていた矢先、いきなり社会人という言葉に戸惑い、その上、教授から「キムラさん」と呼ばれて、別世界に足を踏み込んだ思いであった。

大倉経専はジェントルマンの社会であった。

地獄で仏に会ったとは、このようなことを言うのか。

監督指導の先輩の言動も紳士的で兄貴のようであった。

8 「豚の餌よりひどい食事」

木村氏は新人生の一割近くが愛知県出身者であることに心強く思うのですが、宿舍の「豚の餌よりひどい食事」に四苦八苦します。愛知県での動員先の食事の方がましであったといえます。帝都東京の食糧事情の現実です。昼間は空襲があるので、朝と夜の二食だけです。

『体重は一日1kgずつ減り一〇日で一〇kg

減って四〇kgを割ったところで止まった。もうそれ以上は減ることはなかった。痩せる限界まで到達したからであろう。完全な骨皮筋衛門となった。

9 空襲、被災農家の消火支援

軍事施設や軍需工場が集中していた立川には米軍戦闘機の機銃掃射や空襲が連日のようにあります。八月二日の大規模な空襲では、大倉の学生達は畑の中に逃げ込みます。

『我々第三寮の連中は一団となって集落から少し離れた田んぼの真ん中に避難した。寮生全員が入ることのできるような防空壕がないのでやむを得ず田んぼの真ん中に避難したが、身を隠す所もないというのは真に心細く不安なものであった』。

そして、農家数軒の消火活動に大倉経専の学生が駆けつけます。

『第一寮の方で火の手が上がっているのを見つけて応援に駆け付け、数戸の農家の消火活動にあたった。道路沿いに滔々と流れる玉川上水の水をくみ上げ、バケツリレーで火を消し止めたが、豊富な水と多くの学生の手があったことによって、絶望的な状況の中で消火に成功し幸運にも焼失を免れた農家の喜びは一入であった』。

総務省サイト内「立川市における戦災の状況（東京都）」によれば、この時の空襲により立川市では二〇名の犠牲者が出てい

ます。大倉経専の学生達に消火活動のお礼として農家からじゃがいも二俵が届きます。これが八月二五日前後までの木村氏達の命を支えました。

10 敗戦

空襲はされるがまま、食糧事情はどん底、学校教育の崩壊、聡明な学徒兵の下士官との会話などの描写を経て、一年前の知人の商社マンの予想通り、巨大爆撃機によって国土が破壊されて、八月十五日、日本は敗戦を迎えます。陸軍立川航空基地の軽爆撃機数機による交戦意志の示威飛行がありますが、その日の夜、大倉経専の学生達は戦争終結を実感します。『夜になって電灯の遮光カバーを恐る恐る外すと、室内がパッと明るくなった。ワーと歓声が上がった。明るい部屋の中を見回し、眩しいばかりの電灯の明かりに平和の喜びが、ふっふっ湧き上がってきた』。

木村氏は八月一九日夕方、新宿駅から長距離列車にのり、翌朝家族の疎開先の岡崎に着きます。やせ衰えた姿の木村氏を「幽霊が現れたと思った」と母親が迎えます。木村氏にもやっと平和がおとずれたところで当冊子の記述は終わります。

木村氏は現在、敗戦後の大倉経専の赤坂から国分寺への移転、戦後の混乱の中で学生生活、寮生活等を振り返る原稿を執筆しているそうです。

昨 年の6月1日、「教職支援室」

ならびに「教職ラウンジ」と呼ばれる新たな学びの空間が、1号館2階の南向きのスペースに、本格オープンしました。「教職支援室」は、教職課程を履修している学生たち、そして教職課程について知りたいと考えている学生たちが、学修上の諸手続を行ったり、さまざまな相談を行うための場所です。現在、学務課の専任職員1名とサポートスタッフ1名が常駐するとともに、教職課程の専任教員3名が相談を受けることで、学生支援の体制を整えています。

「教職支援室」の隣にある「教職ラウンジ」は、教職課程を履修している学生たちが相互に学び合うための空間です。ここには、模擬授業のための黒板、可動式の机、椅子、A/V機器のほか、各教科の教科書、副教材、教育新聞、学生が実際に教育実習で作成した指導案などが備えられています。この「教職ラウンジ」は、東京経済大学の教職課程で学ぶ学生たちにとって、念願の空間でした。これまでも教師を志す意欲の高い学生たちが在学していました。が、個人の努力が点にとどまり、ネットワークとしては広がっていませんでした。教育実習が近づくと図書館で一人で授業づくりのための教材研究をし

「教職ラウンジ」の開設にあたって

高井良健一

経営学部教授 教職課程担当

て、一人で教員採用試験のための勉強をする。このようなスタイルでの学習が主流でした。ここ数年來、学生たちから、教職課程とともに学んでいる仲間たちと切磋琢磨できる空間がほしいという切実な声が上がっていました。

「教職ラウンジ」が開設されたことで、学生たちの学びは、これまでより自律的で、協働的なものに変容してきています。具体的には、有志の学生たちが自主的に学びの企画を立ち上げて、定期的に模擬授業を行う機会をもつなど、学生主体の学びが広がっています。開設早々に、教職ラウンジで授業の腕を磨くことで、教育実習でベテラン教師顔負けの授業を実現した学生があらわれました。私もその時の研究授業を参観しましたが、学生がここまでできるのかと、あまりの質の高さに驚いたほどです。その学生によると、同じ学校で実習を行った他大学の学生と比較すると、模擬授業の経験、授業検討会で批評を受ける機会が圧倒的に多かったとのことでした。

また、本年度の教員採用試験では、倍率が高く、最難関と言われている高校公民において現役での合格者が出ました。これはここ20年間で、はじめのこのことです。このように、「教職ラウンジ」の教育効果は、少しずつでは

ありますが、はつきりとかたちをとってきているように思われます。

さて、

「教職ラウンジ」の開設にあらわれているような東京経済大学の教職課程のイノベーションですが、昨今の我が国の教員養成改革における議論をバックグラウンドとしています。現在、国の教育政策において、教員養成の質の向上が課題となっています。

現在、小学校、中学校、高等学校の教育現場は、子どもの貧困、学力格差いじめ、不登校、SNS（ソーシャル・ネットワーク）上のトラブル、さまざまな保護者への対応など、幾重もの困難を抱えています。こうした問題に対応するために、これからの時代の教師には、従来にも増して、高度な知性ならびに他者を気遣う配慮の能力が要求されています。

教職を志す学生が、これからの時代の教師に求められる能力を獲得し、伸ばしていくためには、大学の正規のカリキュラムだけでは不十分です。もちろん、大学の教職課程で学ぶカリキュラムは教師になるために必須なものであり、私たち教職課程のスタッフは、さまざまな工夫をしながら、日々の授業や教育活動に臨んでいます。しかし

ながら、実際に教師として生身の子どもたちと向き合うこと、実際に教育実習に行つて子どもたちに対して授業を行うことは、極めて能動的で創造的な営みであり、これを実現するためには、学生たちが自ら企画し、学び、協働する経験がどうしても必要になります。

さらには、経験をもつた先達から教育現場の実際について具体的な課題、取り組み、省察について学び、教育の専門家として生きていくことのリアリティを掴むことも必要になります。

「教職ラウンジ」を開設して明らかになったことは、東京経済大学の学生たちの企画力の高さです。模擬授業の企画、教職課程履修上の相談、教員採用試験の対策など、教育実習を終えた4年生が中心となつて、「教職ラウンジ」を盛り上げてくれています。そして、下級生もまた4年生から刺激を受けて積極的に授業づくりにチャレンジしています。この良き伝統を、今後も継承していきたいと考えています。

去

る7月2日(土)には、卒業生の成瀬大地さん(2011年度経営学部卒)をゲストに招いて、「教職ラウンジ」開設記念イベントを開催しました。

成瀬さんは、民間企業で4年間働いたのち、昨年度、社会人枠にて、東京都の教員採用試験(地理歴史科)



教職ラウンジでの学生企画「模擬授業」の様子



教職ラウンジ開設記念企画講演「教職への道」。成瀬大地氏(左)と高井良教授(右)

に見事合格し、現在、東京都立東高等学校にて、教壇に立っています。オーストラリア留学の経験もあり、大学時代には教職課程で学びながらも、世界中を旅してきた成瀬さんの話は、学生たちを大いに魅了しました。高校で実際にしている授業を模擬授業として行つてくれましたが、写真、絵画を用いたわかりやすく楽しい日本史の授業に、学生たちも引き込まれました。これまで積み上げてきたさまざまな経験が教師としての仕事に大いに生かされていることが伝わってきました。社会人枠での採用という可能性を示してくれたことで、学生たちも長いスパンで努力を続けていく勇気を得たようでした。

このように「教職ラウンジ」を開設したことによって、教職に就いている卒業生と在校生との学びのネットワークも生まれつつあります。さらには、教職課程のウェブサイトも日々充実させています。全国各地で教師として活躍している卒業生への取材にも着手しており、さらなるネットワークの拡充に努めています。

教

職課程のスタッフとして全国各地の学校を訪問して思うことは、かつて東京経済大学の教職課程で学んだ人々が、さまざまな場所で、教師と

して大変良い仕事をされているということです。本学の教育実習生の指導教員が本学の卒業生であったということも何度が経験しています。信頼される教師を世に送り出している本学の伝統を、今後も大切に継承していかなくてはならないと思っています。

これから全国の大学の教職課程は、淘汰の時代を迎えます。教員養成という観点において、実質的な教育機能を担うことのできない教職課程は、早晩存続することが難しくなります。そして、今後、教職課程は、大学における学びのカリキュラムをさらに充実させることにも、教育委員会との連携、学校でのインターシッピングの学びなどを包括しながら、より高度で実践的な教員養成のプログラムを準備していくことが求められています。

東

京経済大学においても、大学と未来の日本社会を支える心ある教育者を育成していきたいと考えています。これまでも多数のすぐれた教育者を輩出してきましたが、今後も、今までに劣らず学びの意欲に溢れる未来の教師たちがこのキャンパスで育ち、日本各地、そして世界で活躍してくれることを大いに期待しています。

過去最多来場者数更新!

2016年オープンキャンパス



東京経済大学は、7月から8月にかけて夏季4日間、10月末に葵祭と同時開催の2日間、計6日間のオープンキャンパスを行い、過去最多の6486人の来場を記録しました。

夏のオープンキャンパスでは、東京経済大学の学びの紹介として、既存の4学部のガイダンス・体験授業とともに、2017年度にスタートする「キャリアデザインプログラム」のガイダンスやワークショップを実施。ワークショップでは、来場者と

学生スタッフがチームを組み、与えられた課題に対して、実際に話し合い、手を動かすことで、試行錯誤しながらも協働する醍醐味を味わいました。また、今年は学生が主体となったイベントを多数企画。「ゼミ発表会」や「ゼミ活動ポスターセッション」で、学生が日々のゼミでの学びを紹介したり、クラブ・サークルの活動を紹介・実演したりと、リアルな学生生活を、学生本人から直接PRしました。

東経大の学生最大イベント「葵祭」

ホームカミングデーも同時開催



東京経済大学の大学祭「葵祭」が2016年10月28日(金)から30日(日)までの3日間、国分寺キャンパスで開催されました。連日トークショーやパフォーマンス等さまざまな企画が行われ、大学構内はまさにお祭りムード一色に染まりました。

29日(土)には毎年恒例となったホームカミングデーを開催し、750名を超える卒業生が母校に帰り、ご家族やご友人と共に学生時代に戻って懐かしく楽しいひと時を過ごしていました。また葵友会の全国支部長会議や秋季懇談会、卒業後60周年同窓生懇談会も同日に開催されました。

体育会サッカー部

東京都大学 サッカーリーグ1部 初優勝

第49回東京都大学サッカーリーグ戦1部第18節の最終試合が、2016年10月16日(日)東京経済大学武蔵村山キャンパスグラウンドで行われ、東京経済大学体育会サッカー部は国学院大学に3-1で勝利し、創部以来初の東京都リーグ1部で優勝を飾りました。本学サッカー部は、昨年東京都大学サッカーリーグ2部

で優勝し本年度1部に昇格し、1シーズン目での初優勝となります。

サッカー部をはじめとする体育会各部の活動拠点である本学武蔵村山キャンパスは、昨年全面リニューアルを行い、体育会各部の練習環境が大きく改善され、試合でも良い結果が残されるという好循環につながっています。また、高橋勇太選手(現代法3年)が最優秀選手ならびに同リーグのアシスト王に輝きました。



関東大学サッカーリーグ参戦をかけた昇格戦に臨みましたが、残念ながら昇格することはできませんでした。

高校生のための 1日東経大生体験 「WEEKDAY CAMPUS VISIT」導入



「WEEKDAY CAMPUS VISIT」はNPO法人NEW VERYが行う取り組みの一つで、高校生が、実際に大学生が出席している講義に参加したり、学食で食事をとったりと「普通の大学」を体験するものです。

高校生・大学双方のねらいとしては、大学の中身を深く知り、偏差値ではなく「自分に合った大学」を選択し、進学後のミスマッチを減らすことにあります。

大学が実施する通常のオープンキャンパスでは、高校生向けの体験授

業や大学のPRポイントを紹介するに留まりますが、この「WEEKDAY CAMPUS VISIT」はありのままの大学を体験でき、良い意味でも悪い意味でも大学の日常を高校生に知ってもらえることができます。

2016年10月、11月に計4回開催され、参加した高校生たちからは、「思っていた以上に大学の授業は難しかった」「先生との距離が近くて良かった」「ゼミの時、大学生が丁寧に教えてくれたのでやりやすかった」などの声が聞かれました。

「わらしべ長者プロジェクト」開催！ 国境なき医師団へ “物々交換繰り返し 得た資金”を寄付



東京経済大学の学生が「わらしべ長者プロジェクト」と題し、大学内で物々交換を繰り返し得た物資を換金し、国境なき医師団へ寄付する社会貢献運動を、「グローバルキャリアプログラム」に所属する学生が中心となり2016年6月13日(月)から17日(金)までの昼休みに展開しました。

渡航に先がけ、社会で役に立つこと、国際的な社会貢献について調べていたところ、国境なき医師団のウェブサイトで、食糧や医療の不足など世界で起きている深刻な問題について知り、今回の企画を实行しようと考えたといいます。

プロジェクトでは、換金が難しそうだが物語があるものとして、沖縄で制作したガラス細工などから物々交換をスタート。それが水筒、新書、ゲーム機やゲームソフト、ポットなど換金できそうなものに換わり、最終的に11,279円になり当初目標であった1,500円を大きく上回り、無事に国境なき医師団へ寄付することができました。

留学期間を終え帰国後「運営側も参加者も楽しめること、かつ人のためになること」をコンセプトにサークルを作りたいと学生たちは話しています。

大倉学芸振興会芸術公演

佐野成宏 テノールリサイタル開催



2016年10月22日(出)、本学卒業生でテノール歌手・佐野成宏さんによるテノールリサイタルが開催されました。スカララッティ作曲の『堇』から始まり、トスティの『セレナータ』などオペラ曲をはじめ、日本の

曲『赤とんぼ』、『見上げてごらん夜の星を』に至るまで10曲を見事に歌い上げられました。最後には、本学の男声合唱団「グリークラブ」とのコラボも実現し、400名近い聴衆を美声で酔わせました。

東京経済大学に御寄付いただいた方々の御芳名

皆様より多くの御寄付をいただきました。ここに御寄付を賜りました方々の御芳名を掲載し、深甚の謝意を表します。御厚志は、東京経済大学の教育および学生支援のより一層の充実のために有効に活用させていただきます。今後とも、本学発展のために御支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2017年1月

学校法人 東京経済大学 理事長 岩本 繁
東京経済大学 学長 堺 憲一

東京経済大学教育振興資金寄付御芳名

教育振興資金については、寄付金御芳名掲載にあたり、ご本人様のご了解をいただいた方の御芳名を掲載させていただきますました。

その他匿名ご希望の方9名様よりご寄付を頂戴いたしております。

(2016年7月1日から10月30日までのご応募分)

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

インターネット寄付のご案内

大学奨学基金等につきましては、インターネットからの寄付のお申込みも受け付けております。

<https://fundexapp.jp/tku/entry.php> → 右記QRコードからアクセス可能です。→

入力内容：寄付目的、金額、氏名、住所、電話番号、メールアドレス、決済情報等
決済方法：クレジットカード決済（Visa、MasterCard）



●申込完了確認メールについて

お申込みいただきますと、申込時に入力されたEメールアドレスに、申込完了確認メールをお送りします。このメールで受付及び決済手続きが完了となります。

●領収書の発行について

領収書は、各カード会社・収納代行業者から本学へ入金された後、ご送付となります。

そのため、領収書の発行までに、お申込み受付より約1～2カ月のお時間を頂戴しておりますこと、御了承いただきますようお願いいたします。また、領収書発行日は、お申込み受付日やカード決済口座からの振替日ではなく、本学への入金日となります。

●参考ウェブサイト「東京経済大学へのご支援をお考えの方へ」

<http://www.tku.ac.jp/tku/kifu/>

お問い合わせ先

東京経済大学 経理課 寄付金担当

〒185-8502 東京都国分寺市南町1-7-34 TEL：042-328-7737 FAX：042-328-7770